

高橋善正・硬式野球部監督が就任記者会見

「大学日本一」目指す―。名門復活への期待

4月から中央大学硬式野球部監督として指揮をとることになった本学OBの高橋善正監督が2月19日、多摩キャンパスで記者会見し、「大学日本一になるんだ」という意気込みでやる」と力強く抱負を語った。元巨人軍投手の高橋監督は、中大時代は歴代4位の通算35

勝をあげ、「名門・中央」の一時代を築いた一人だけに、名門復活への熱い期待が寄せられている。

定したと報告したうえで、中央大学が2010年に創立125周年を迎えるのを前に「駅伝と並んで硬式野球の強化策を図っている」と説明。高橋監督に対しては、「オール中央態勢をとる柱になる」と期待を込め、「1部昇格を近いうちに実現すると確信している」と強調した。

記者会見が行われた多摩キャンパスの硬式野球部グラウンドには、新聞はじめスポーツ誌など10数社から大学野球担当記者が集まり、高橋監督に対する関心の高さを伺わせ

た。冒頭、福原紀彦・硬式野球部長が、18日に開いた理事会で高橋氏を新しい監督として招聘することを正式決

これを受けてマイクを握った高橋監督は、「監督をやるとはつゆほども思っていないかった」としながらかも「恩返しという意味も含めて引き受けた」と初心を明かした。

部で低迷している現状については「1部以上がるときは、安定勢力となり、常に優勝を狙えるようにする。オール中央の力を結集すれば難しいことではない」と言明した。



選手らと「ガンバロー」

記者会見する高橋善正監督



した。また、「引き受けたからには、大学日本一になるんだという意気込みでやる」と決意を示したうえで、2

記者との質疑に移り、高橋監督は今後の強化ポイントについて「野手の攻撃力をつける」として、「技術をよくするには練習以外には」と強調。今後はプロ野球で活躍した野球部OBらの指導、協力も得ていく考えを明らかにした。

高橋監督は昭和42年3月、法学部政治学科卒で、63歳。高知商業高から中大に進学。

大学時代は東都大学リーグ戦通算35勝（15敗）をマーク、昭和40年秋にはシーズン最多の9勝をあげ、右横て投げからの制球力抜群の投手で鳴らした。

昭和42年に東映（現日本ハム）に入団し、15勝11敗でパ・リーグ新人王を獲得。昭和46年8月には西鉄（現西武）戦で完全試合を達成した。

野球部OB会長をつとめ、昨年から投手コーチ。「気が弱くて、臆病だったので、コントロールのいいピッチャーになれた」と自己分析する高橋監督。でも「ク

ソまじめ。少々のことでは妥協しない」という真つ直ぐな性格が熱血指導を印象づける。
 通算24回のリーグ優勝を誇るが、2部に降格して低

迷を続ける硬式野球部。黄金期をよく知るOBからも名門復活の期待を込めて「タカハシ・ヨシマサ」コー

たんですけど、時間があれば世界一周ぐらいしたかった」と佐々木さん。それにあわせて、「語学の勉強もしておけばよかった」との意見もあがった。

企業が求める人材、またどんな後輩と働きたいかということに関しては、「コミュニケーションのとれる人」ということでほぼ意見が一致。佐々木さんが上司

就職本番前に、OGら招きパネル開く 「仕事は楽しいものじゃない」と現役記者

「就職本番、その前に！
 く働く女性のキャリアビジョンの作り方」をテーマにしたパネルディスカッション（主催・学生会女性白門会）が1月26日、多摩キャンパス3号館で行われた。会場には就職活動を控えた3年生を中心に女子学生が多数出席、パネラーらの体験談を熱心に聞き入った。

第1部は、「社会人OG
 が語るく女性の働く現場から後輩へのメッセージ」と題し、OGの東京ガスの桑

名朝子さん（1994年法卒）、野村證券の佐々木智恵美さん（2004年文卒）、ウシオ電機の浮谷直美さん（2004年商卒）、キャノンの大隅絵美子さん（2007年法卒）がパネラーとして参加。
 まず就活について「自分が自分らしく働けるか、どういうふうな仕事をしていきたいかで仕事を選びました」（桑名さん）、「自分がどういふ人間か、何ができるのか、何をやりたいのかなど、苦しくなるまで考え

ました」（佐々木さん）、「自分が成長できる、向上できる、自分の人間力を高めていけるということを就活の軸にしました」（大隅さん）、「女性が活躍しているところへ行きたかったので、20名から30名以上のOGに話を聞きに行ったり、電話したりしました」（浮谷さん）とそれぞれの体験を披露した。

学生時代に何をやるかについては、「旅行」というのが多数意見。「4年生の夏にインドに40日間行っ



質疑応答する内定者のパネラー

に実際に聞いてみたところ、「一緒に飲みにいける人」という答えが返ってきたという。

また、「ポジティブに考えられる人」（桑名さん）、「人間としての最低限の礼儀が備わっている人」（大隈さん）などという意見も

職業の労働環境について桑名さんは「家庭に重点を置くか、仕事に重点を置くか、いろいろな働き方が選べるので、自分のスタイルで働きやすいです」と紹介。他方、浮谷さんは「制度は整ってきているけれども、実際に活用されているかどうかは、OG訪問などして自分の足で調べるべきです」とアドバイスした。

また桑名さんは、入社後のキャリア形成について「自分の許容範囲を広げておくことが大事だと思えます。私は12年間法律に関する仕事をしてきたんですが、

この2年間は営業をしています。自分が活躍できるところを広げておくのが大事だと思います」と語った。

第2部は「就職内定者が語る」就職直前チェックポイント」と題し、三菱東京UFJ銀行に内定した越加奈子さん、みずほ銀行に内定の小林美和子さん、神奈川県庁に内定の堀野真耶さん、タカラベルモンドに内定した平山裕子さんがパネラー（全員法4）として参加した。

ファッション関係のサークルに所属していた平山さんは、当初はアパレル業界へ行きたかったというが、急に目覚めてネイリスト1級の資格を取得。就活は「美容のスペシャリストとしてやっていけるところをあきらめずに探していったら、総合的に美容を扱うタカラベルモンドにつきあたりました」という。将来は美容師資格をとって就職先の企

業がやっている美容学校の先生になることを目指す。

ただ、平山さんは「最初から業界をしぼっていたこと」を就活の失敗にあげた。

「就活を通していろんな企業をまわることで、社会の動向を知ることができるので、できるだけいろんな企業をまわったほうがいい」とアドバイスした。

フランスへ1年間の交換留学をした越さんは、夏採用で三菱東京UFJ銀行に決まった。面接での自分の評価について「企業に評価を聞くチャンスがあれば、聞いたほうがいいです」とアドバイス。また、ESの書き方に関して「長い文章で書くことから始めて、指定された文字数にあわせて削る。その場合、キーワードを残しておくことと、一歩ひいて企業の視点からみてみることで」と具体的に指摘した。

小林さんは「みずほ銀行

には身近に先輩が何人もいて話を聞いていたので、働く現場が想像しやすかった」という。また、ソフトボールをやっていた堀野さんは、「地域行政の立場でスポーツに関わっていきたい」と神奈川県庁を選んだ理由をあげた。

第2部終了後、17年間、日本経済新聞の記者を勤めているOGの阿部奈美さんがミニ講演。バリバリの現役記者である阿部さんは、「仕事は楽しいものじゃない。苦しかった」と安易な考えをバツサリと切り捨てたうえで、「6、7年してやっとこの仕事の醍醐味がわかってきました。素人でもトップにインタビュして、問題提起や意見ができるし、耳を傾けてくれる」と仕事を身につける厳しさを強調した。

また、実際に採用試験の面接官をした経験から「面接では、その人がどうい

話を、どういう距離感で、どう話すのかをみています。その人の素をみているんです」と指摘。「学生のときには、いろんな勉強をしたり、いろんな人と会ったりして、いろんな価値観を受け入れていって欲しいです」と要望した。

最後に「男女平等というけれど、いいとこどりはいけない。上司は男性にはわりとストレートに言うので、学ぶ機会があります。でも女性には『いいよ、やらなくて』と言うことが多いので、学ぶ機会がなくなりま

す。これは5年10年とたつていくと差がついていくんです。損です。だから、そう言われたらそれは罠だと思って仕事をやってほしい」と現場体験にたった具体的なアドバイスを贈って、講演を締めくくった。

（学生記者 武田朋実 11法 学部3年）

教養テレビ番組

知の回廊

Webから教養テレビ番組を見る!! ダイジェスト版公開中

中央大学「教養番組『知の回廊』」番組ダイジェスト版 2006年度 - Microsoft Internet Explorer

中央大学

教養番組「知の回廊」
番組ダイジェスト版 2006年度

番組紹介

01 「教育現場と法科教育～司法官の視点から～」 講師：木村博美

02 「トランスジェンダーの世界～性別特異性論の自問自答～」 講師：正見

03 「Access to Entertainment」～著作権と著作権～」 講師：石川一也

04 「動化する大学入試制度～高度人材の可能性～」 講師：斎藤正史